2025 年度 JESMA 研究支援制度 研究成果報告書

一般社団法人 日本経験サンプリング法協会 殿

東洋大学大学院 社会学研究科 社会心理学専攻
大川 明李

この度の研究支援，誠にありがとうございました。研究成果について，下記の通りご報告いたします

研究課題名：日常的な相互作用の質が寛容の判断に及ぼす影響の検討

目的

文脈依存的な性質が確認されている寛容の判断について（Verkuyten & Slooter，2007），この文脈依存性が質問紙調査などで人々の寛容を調査する際の回答者がいるのが公的空間か私的空間かなどの状況や，個人の精神状態（ストレスや気分），直近の相互作用経験の質や量によっても存在するのかを経験サンプリング法（ESM）を用いて検証する。またこの変動のパターンが Verkuyten（2022）の寛容の概念的整理に基づく「異なる信念や価値観を肯定的に評価・尊重する傾向（受容的寛容志向）」と「賛同できない信念や行為についても相手の権利を尊重し，自らの否定的反応を抑える傾向（忍耐的寛容志向）」という比較的安定した個人差によっても異なるかを併せて検証する。本研究の目的は，以上の 2 点の検証を通して，日本人の外国人に対する寛容判断の文脈依存性を検討し，参加者の個人差や回答時の状況，直近の外国人との接触・交流経験が寛容の判断にどう関連するのか明らかにすることである。

方法

CrowdWorks を通じて募集した日本在住の 18 歳以上の日本国籍者 101 名が調査に参加した。そのうち，ESM の回答完了率が 75%以下であった 5 名と事前調査が未完了であった 1 名を除いた 95 名（男性 45 名，女性 50 名，平均年齢 41.90 歳，$SD = 9.70$）を分析対象とした。ESM 専用ソフトウェア Exkuma を用い，14 日間，9〜21 時の間に 1 日 3 回（計 42 回），ランダムな時刻に調査 URL を送信した。各調査では，場所，周囲の人数，ストレス，気分，直近 1 時間の外国人との接触・交流の有無と形式（直接的・間接的・その他・なし），内容（自由記述），感情的評価（0＝ネガティブ〜10＝ポジティブ），許容度（「日本で暮らす外国人の人々が自分たちの文化や価値観に基づいて暮らすことを，社会の中でどの程度受け入れるべきだと思いますか？いま現在のあなたの考えについてお答えください。」）を尋ねた。接触経験がなかった場合は，直近 1 時間で最も印象に残った出来事とその感情的評価を尋ねた。事前・事後調査では個人差として性別・年齢等のデモグラフィック項目および別研究で作成した受容的・忍耐的寛容志向尺度（Verkuyten，2022 の概念的整理に基づく）等を測定した。また，すべての調査終了後のデブリーフィングにおいては研究の背景や問題意識，調査の目的について再度丁寧に説明し，本調査へ参加したことによって引き起こされる可能性のある在留外国人に対する不安といった否定的感情の緩和に努めた。本研究は東洋大学大学院社会学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施された（P260004）。

結果

許容度を目的変数とし，SAS の PROC MIXED を用いて 95 名の 3,746 時点の回答を対象にマルチレ

ベル重回帰分析を実施した。各測定時点の回答を Level 1（個人内レベル），参加者を Level 2（個人間レベル）とし，接触経験の感情的評価（以降「接触評価」）と寛容志向のクロスレベル交互作用を検討した。参加者ごとのランダム切片に加えて接触評価のランダム傾きを設定した（Table 1）。

分析の結果，私的空間にいるか公的空間にいるかどうか（場所・周囲の人数）と許容度との関連は限定的であり，周囲に誰もいない場合と比較して，少人数の他者がいる場合にのみ許容度が有意に高かった。ストレスや気分については，個人間レベルでは許容度との有意な関連が認められなかったものの，個人内レベルでは，普段よりストレスやネガティブ気分が高いときほど許容度が低く，ポジティブ気分が高いときほど高かった。

外国人との接触・交流経験については，個人内レベルでは，直接的・間接的な接触の有無と許容度との有意な関連は認められなかった一方，接触評価は許容度と正の関連を示した（$B = 0.09$，$p < .001$）。つまり，外国人との接触経験があったこと自体よりも，その経験がポジティブであったかネガティブであったかという感情的評価が，その時々の許容度と関連していた。個人間レベルでは，直接的接触の報告割合が高い人ほど許容度が高かった。

さらに，接触評価と受容的寛容志向とのクロスレベル交互作用が有意であり（$B = -0.04$，$p = .032$），受容的寛容志向が高い人ほど，外国人との接触経験がポジティブであったかネガティブであったかによる許容度の違いが小さい可能性が示された。ただし，忍耐的寛容志向との交互作用は有意ではなく（$B = 0.01$，$p = .491$），両交互作用の係数の差も有意ではなかった（$p = .092$）ため，両志向の調整効果に明確な違いがあるとは結論づけることはできなかった。

Table 1.
許容度を目的変数とするマルチレベル重回帰分析の結果

	B		*p*
切片	5.63	***	＜.001
Level 1（個人内）			
測定時点	-0.004	***	＜.001
私的空間ダミー（1＝自宅，0＝自宅以外）	-0.03		.261
少人数ダミー	0.06	**	.008
大人数ダミー	0.03		.376
ストレス（個人平均中心化）	-0.03	**	.002
ポジティブ気分（個人平均中心化）	0.11	***	＜.001
ネガティブ気分（個人平均中心化）	-0.06	**	.002
直接的接触ダミー	0.08		.106
間接的接触ダミー	-0.03		.154
接触・交流経験の感情的評価	0.09	***	＜.001
Level 2（個人間）			
受容的寛容志向（全体平均中心化）	0.41	***	＜.001
忍耐的寛容志向（全体平均中心化）	0.64	***	＜.001
ストレス	-0.09		.480
ポジティブ気分	-0.05		.735
ネガティブ気分	-0.21		.300
直接的接触の割合	2.74	**	.006
間接的接触の割合	-0.27		.533
年齢（全体平均中心化）	0.01		.291
性別（男性＝1，女性＝0）	-0.17		.321
教育レベル			
高校	-0.54	*	.021
専門学校・短期大学・高等専門学校	-0.41	†	.078
大学院	-0.02		.912
Level 1 × Level 2（クロスレベル交互作用）			
接触評価×受容的寛容志向	-0.04	*	.032
接触評価×忍耐的寛容志向	0.01		.491

注1）参加者数95，使用した観測数3,746。Bは非標準化偏回帰係数。
注2）直接的・間接的接触ダミーの基準は「交流なし」，人数ダミーの基準は「0人」，教育レベルの参照は「大学」。
† p＜.10，* p＜.05，** p＜.01，*** p＜.001。

考察

本研究では，経験サンプリング法を用いて，日本人の外国人に対する寛容判断の文脈依存性を検討した。その結果，回答時の場所や周囲の人数との関連は限定的であった一方，ストレスや気分，直近の外国人との接触経験の感情的評価が，その時々の許容度と関連することが示され，従来の一時点的な調査では捉えにくかった，日常生活における心理状態や接触経験によって寛容判断が異なるという文脈依存的な性質の一端を明らかにすることができた。また，接触経験の感情的評価と許容度との関連の強さが，寛容志向という個人差によって異なる可能性も示されたが，この点に関しては，受容的寛容志向と忍耐的寛容志向の調整効果に有意な差が認められなかったため，今後は忍耐的寛容が生じやすい状況を設定して測定するなど，より詳細な検討が望まれる。

引用文献

Verkuyten, M. (2022). *The Social Psychology of Tolerance.* Taylor & Francis. Chapter 3.

Verkuyten, M., & Slooter, L. (2007). Tolerance of Muslim beliefs and practices: Age related differences and context effects. *International Journal of Behavioral Development, 31,* 467–477.